

## 部長登場

林務観光部長

宮脇 幸次

林業行政において、現在最大の課題は「間伐」であると考えます。というよりも「間伐」という問題の中に、現在の林業がかかっているいろいろな問題が集注してあらわれていると見るべきでしょう。

林業については不案内なむきも多いと思いますが、この際ご説明しておきますと、「間伐」というのは、植林した苗木が大きくなって、林がこみ合ってくるのに応じて、林木を伐りすかしてやることを言います。畑で言えば、大根の間引きのようなもので、これをやらなければ、一本一本の木が、ちゃんとした木材のとれる大きさに育ちません。と同時に、林全体としても病虫害や風雪害にやられやすくなります。したがって間伐は、育林上、欠かせることのできない仕事です。



この間伐が、何故、現在大きな問題となるかという点、基本的には、間伐を行うべき林齢にさしかかった森林が、この数年間に急激に増えて、かつてなかった大面積になったためです。我国

では、戦後、木材特に建築用材の資源増強を目指して人工造林が推進され、本県でも昭和二十六年ころからスギ、ヒノキの造林面積がいちぢるしく増加していましたが、この、いわば爆発的に増大した人工林が、植林後二〇年余りたつて、今や間伐を必要とする林齢に達したわけですから。ちなみに、本県の民有林において、スギ、ヒノキの一五年生から三五年生までの間伐林齢にある人工林は、約七万五千ヘクタールでスギ、ヒノキ人工林の三八割を占め、しかも今後五年間に、新たに四万ヘクタールが間伐林齢に達します。

## 自然環境保全の担い手

——最大の課題「間伐」——

このように、間伐を行わなければならない森林がたくさんあるところに、一方では、これの実行を困難にする要因があります。その第一は、農山村では、過疎化によって森林労働の働き手ははたして減少していることです。必要な労働力をどうして調達するかが、まず難問です。第二には、間伐木の中には木材として利用できるものがかなりありますが、外材に押されて国産材の売れゆきが不振になっている市況下では、小径木の多い間伐材は売りにくいということです。小径丸太の需要を開発し、有効な販路とし

て流通に結びつけなければなりません。そして、第三に、このような、労働力の不足と需要不振に対処するためには、労働生産性を高めて伐採コストを低減させなければならぬのですが、その鍵となる基盤施設—林道や作業道—の整備が遅れているという状況があります。木材という大きくて重い物を生産する林業にとって、林道や作業道は作業の合理化、効率化のため不可欠の施設であり、是非とも適切な路網の整備を実現することが必要です。

間伐の問題ということで少々長く述べ

ましたが、実は、今日間伐において問題となっていることは、そのまま近い将来、木材生産林業そのものが当面する問題です。現在、間伐すべき林齢に当たっている森林は、間もなく通常の伐採適齢に達しますが、輸入外材が必要の六五割を占めている状況の下で、国産材のシェアを拡大し販路を確保するためには、今日間伐材が直面しているのと同じ問題を打開しなければなりません。したがって間伐の問題を解決することは、そのまま、木材生産林業そのものの将来をひらくこととなります。非常に困難な課題です

が、避けて通るわけにはゆかないものと考えております。

もちろん、林業の問題は木材生産だけがすべてではありません。林家の大部分が、林地面積二ヘクタールに満たない零細所有であり、かつ農家兼林家であるというのが実態です。従って、地域的協業化によるスケールメリットの実現がひとつの課題となり、ここでは森林組合の強化をはかることがその大きな鍵になります。また、キノコ類、タケノコ、ワサビなどの食用林産物の生産振興が、短期的換金作物部門の強化という意味で山村における農林複合経営上大きな価値を持つこととなります。

さらに、森林が、環境保全およびレクリエーションの分野で果たすべき役割に対する社会的要請が高まっていますから、この方面については、森林を、物的商品生産業としての林業の場としてとらえる観点を超えたところからの取り組みが必要です。

本県の森林は四六万一千ヘクタールにおよび、県土の半ば以上を占めています。産業の資源として、また人間の生活を守る自然環境保全の担い手として、その役割は重大です。森林を相手とする仕事は、植えて育てて数十年という浮き世ばなれした気の長い仕事ですが、同時に、その時その時の社会的要求に対応する施策がなされねばなりません。林務観光部をあくまで責務の重さに、身のひきしまる思いの毎日を送っております。

# 滑走路延長工事始まる

国際空港への期待を担う熊本空港滑走路の延長工事が、昨年十月十一日から始まった。この工事は第三次空港整備五カ年計画で行われるもので、延長される距離は五百メートル、幅四十五メートルで、総工費十三億円。

遅くとも五十五年度には完成し、五十六年四月一日から使用が開始される。この工事が完成すると現在の二千五百メートル滑走路は三千メートルとなり、国際空港としての条件を備えることになる。

